

3D映像で宇宙学が

関西学院大 中井教授が講演

関西学院大学理工学部（兵庫県三田市）物理学科の中井直正教授（65）の講演会が28日、田辺市新庄町のビッグ・ユーであった。参加者は3人で車や観望の映像を觀賞し、宇宙の進化や発見について学んだ。

天文学者の中井教授は10日、講演を兼ねた。96年、世界で初めて太陽系以外の惑星である巨大プラトナール（木星型惑星）の発見に貢献した。講演では、3次元映像を使った「3次元宇宙の進化」について、大規模な宇宙の進化の歴史を振り返った。



3D映像で宇宙の映像を觀賞する参加者（田辺市新庄町のビッグ・ユーで）

の説明から始まり、太陽系は、地球や火星や金星や木星や土星から近い順に3次元で再現。実際に撮影されている位置関係に基づいて説明した。138億年前に宇宙が誕生し、ビッグバンによって星や銀河が形成された様子もコンピュータシミュレーションで再現した。

講演では、85年に初めて発見された太陽系外の惑星「系外惑星」について説明。これまでは恒星の光の影響で太陽系外の恒星を観測する惑星の撮影が困難だったが、新たな手法によって系外惑星が発見されると探査が進んになり、4千個以上の系外惑星が見つかっているという。近年は生物がいる可能性がある系外惑星が見つかっているという話も述べた。

中井教授は、南極に10に数億の電波望遠鏡を建設する「ロケット」に取り組んでいる。講演では計画について、水素が燃料に少ないなら観測の条件が良い南極の高緯度帯に電波望遠鏡を設置することなどで、これまででは見えなかった領域の観測を可能にする」と説明した。

「宇宙の謎」を体験した田辺東部小学校4年の船渡佑和さん（10）は「面白いことに、数の星があることが分かって驚いた」と感心した様子。みなべ町芝の通信制高校生、大橋拓斗君（17）は「楽しかった。南極に新しい望遠鏡ができればもっと、星や銀河の発見が増えると思う」とわくわくする（二）と笑顔で話した。